

四月二十七日

朝六時五〇分、六点目の銅版画を仕上げ。これは少々、趣向を変えてみた。主題は同じである。針で銅板をひっかき続けたのは変りない。針先が意のままにならず、あらゆる方向へ勝手に動いてしまうのが実に面白く、妙味がある。しばらく時間を置いて、又、製作する気持ちが湧いてくるのかどうか、自己観察してみよう。ともあれ、一週間程を楽しんだ。又、お陰様で規則正しい生活の連続であったので、鋭気を養う事もできた。八時半、スケッチ一点製作。流石に少し計り疲れた。九時半、六点の銅版画を最終チェックする。十時半、六点をパッケージして、全ての作業を修了。どんな刷り上がりになるのか楽しみだ。ここに描いたモノが何を意味するのか全く自分では解らない。少し時間が経つたら解るのかも知れぬが、解っても仕方ない事なのかも知れない。

日本の夏、田舎の小さな海沿いの町に居る。大通りを走る車も少ない。路地に人影も無い。自分だけが小さく短い影と共に居る。セミの声が騒然と渦巻いている。太陽は頭上に停止したようだ。そうか、今は盆休みなんだ。沢山な死者が、それぞれの家に戻る日である。だから、町は仏壇の中の様に静寂そのものだ。「カーン」と何かの音が響き渡った。虚空からの高い音だ。この音の感じを銅版に彫ってみた。

シシリアの春。海沿いの古い都市を歩いている。古い神殿の遺

跡を幾つか巡り歩いている。遠い国の神話を思い起こしてみたりする。散乱した石柱の巨大な破片や、石畳の陰に、小さな花々が咲き乱れている。ここでも「カーン」と音が響くのが聴こえる。

そんな音の感じを彫ってみた。

随分多くの遺跡を巡ってきた。けれど、どこでも、この音がつきまとってくる。最近、今の都市、今、自分が住み暮らしている町を歩いても、この町が何だか遺跡そのもののように思えてしまう時がある。小汚い遺跡だけれど、同じ様に、全てが失われて、何もかもが空虚である。死者の影が満ちている。今、現在がすでに崩壊しているような気がしてならない。今、現在そんな感じを銅版に彫ってみた。